

市郊外で、日本福祉大学の学生などが乗った夜行のスキーツアーバスがダムに転落し、25名が死亡するという事故が起こっていた。芦高生を乗せた10台のバスは、12日の夕方近くに、事故現場の急カーブを通り過ぎて戸隠へと向かった。13日朝、戸隠村の宿舎の窓辺には長いつらが垂れ下がり、戸隠連山が異様な姿を見せていた。午前9時から開校式が行なわれ、眉毛も凍る寒さの中で、生徒たちは元気にスキーに興じた。3日間の思い出多いスキー実習を終え、15日の午後7時半、芦高生は宿舎を出発して帰路についた。

2月25日に芦高第37回卒業証書授与式が行なわれ、第40期生男子195名、女子203名、計398名が卒業した。3月16日には高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に合格者423名が発表された。なお3学期には、理数コースの設置をめぐってさまざまな論議がなされた。兵庫県ではすでに1965（昭和40）年度に体育科が設置され、さらに1983（昭和58）年度に県西の音楽科や芦屋南の国際文化科が設置されるなどしていた。さらに1986（昭和61）年度からは、特色ある学校づくりの一環として、英語コースおよび理数コースが設置されることになった。そこで本校としては、理数コース設置の是非が論議されたのである。本校の進学成績の落ち込みなどから考えて、何らかの現状打開を望む声もあった。しかし、狭い芦屋学区を考えると、あまりメリットがないばかりか、普通科の生徒と理数コースの生徒をかかえることによるデメリットが大きいのではないかという否定的な意見が多かった。結局、理数コース設置の論議は次年度に持ち越された。

## 2 体育館改築のころ（1985～88年）

1985（昭和60）年4月8日に第1学期始業式ならびに入学式が行なわれた。12日は創立記念日で休業日、18日には生徒大会が開かれ、自治会の決算および予算が承認された。5月2日には第26回定期戦が実施され、芦高は11-8で勝利を得た。10日には春季遠足が実施され、1年生はゴロゴロ岳、2年生は修法ヶ原、3年生は甲山に出かけた。なお、このこ

ろ淡路島では「くにうみの祭典」が開催中で、27日に育友会は、「おのころアイランド」見学を中心とする研修旅行を実施した。

6月6日に自治会役員選挙の立会演説会、7日に投票、そして17日に新旧役員の引き継ぎ式が行なわされて第38代執行委員会が成立した。この年の自治会役員選挙は、定数と同じ7名の立候補者であったが、会長および副会長に対する不信任票がかなり多かったことが注目された。

このところ、芦高の進学成績の低下がしばしば指摘されるようになっていた。そこで2年生の担任団は、その対策の一つとして、6月12日から国数英の3科目について早朝補習を実施することにした。放課後の補習は、すでに以前から各教科によって、適宜実施されていたが、進学のための早朝補習に学年として取り組むのは、芦高にとってはじめての試みであった。補習を早朝に実施するのは、放課後の補習がクラブ活動の支障となり、また補習を受けれない生徒が出ることに対する配慮であった。これ以後、早朝補習は、必ずしも学年が組織的に実施しているわけではないが、一部の教師の努力によって今日まで続けられている。

1962（昭和37）年6月30日に完成した体育館は、建築後20年余りが経過して相当老朽化し、校内では改築を望む声がしだいに高まりつつあった。浅場校長は着任以来、3年がかりで県への要望を続け、ようやく体育館改築が認められることになった。1985

（昭和60）年の5月初めに、次年度の予算獲得の見通しの上で、体育館の改築計画が具体化はじめ、5月15日の職員会議ではじめて報告された。改築の実現はもう少し先のことと思われていたため、職員にとっては思いがけない朗報であった。なお、工事期間が1年もかかるため、改築よりは改修で済ますという考えもあったが、改修工事費が1億2000万円程度を要する上に、体育館の将来などを考えると改築する方がよいという考えが、大勢を占めた。

新体育館については、新設高校に多く見られる標準型ではなく、本校の種々の条件にかなう体育館建築の希望が強く、現実的に可能な最良のものが求められることになった。また格技場の吸収や地下食堂

の移転も考慮された。しかし、食堂移転となると、昼食時に多数の生徒が道路を横断することになり、危険が予想されるため、新体育館には食堂は設置されないことになった。また本校周辺が二種住宅地に指定されていることや芦屋国際文化住宅都市建設法の関係から、体育館改築については種々の制限が考えられた。とくに建物の配置は近隣住宅の日照権の問題もあり、十分に考慮されねばならなかった。

6月8日に第29回県高校総合体育大会が開かれ、弓道部女子が団体3位となった。ついで弓道部は国体近畿地区予選に優勝し、女子1名が国体出場を果たし、秋の近畿大会にも出場した。また水泳部も近畿高校選手権大会に出場した。このところ着実に実力をつけてあるラグビー部は、秋の全国大会県予選で前年に続いてベスト8に進出し、2名が県高校優秀選手として表彰された。文化部では、演劇部が県の高校演劇コンクールで優秀賞を受け、将棋部が春季リーグ戦で優勝、県高校将棋選手権大会で準優勝の成績をおさめた。

6月24日に、文化庁主催の第10回歌舞伎鑑賞教室が西宮市民会館で開かれた。当日は午前中4時限の40分短縮授業を終えた後、午後2時から生徒たちは「仮名手本忠臣蔵」の第七段目の「一力茶屋の場」を鑑賞した。なお、この年の夏からようやく本館も冷房が入るようになった。そして前年と同じく夏休み中の8月5日から、2泊3日の日程で1年生の野外活動が大山で実施された。テント泊と宿舎泊の組み合わせは従来通りで、キャンプファイアは2日目に実施された。



第37回記念祭の体育祭

第37回記念祭は、このところ自治会展示が遊び中

心になっていることの反省に立ち、“平和を願う～今、同世代の若者に何ができるか～”をテーマとした。食糧危機や残留孤児、難民問題などが戦争に起因していることから、戦争を繰り返さないためにも「平和」について考えるということがその趣旨であった。そして第34回記念祭にならって、1・2年生の全クラスが自治会展示のクラス展示において、テーマにそった展示を行なうこととされた。

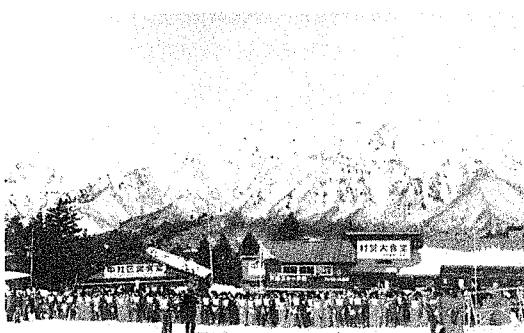
9月25日に開幕式および体育祭が行なわれた。はじめ天気はぐずついていたが、しだいに秋晴れが広がってきた。26日にクラス展示が行なわれ、ビデオや映画、戦時中の食べ物の製作、原爆の模型、歌、写真やパネルの掲示、アンケート、チャリティーバザーなど、さまざまな工夫をこらした内容となった。しかし、3年生は例年通りの喫茶店やライブ、テレビ番組のコピー、のど自慢などが認められたため、3年生の展示にだけ人が集まり、1・2年生のまじめな展示は影が薄いものとなった。27日にはルナホールで文化部公演が行なわれ、邦楽部・ギター研究部・演劇部・コーラス部・応援団・放送部・吹奏楽部が出演した。28日の体育館における映画会では「禁じられた遊び」が上映された。文化部展示は28・29日に行なわれ、29日には図書館においてこの年で3回目になる“Free Talk A.U.S.S.”が開かれた。また献血の呼びかけや例年通りのバザーも、記念祭中に行なわれた。

文化部展示の低調さは深刻であった。とくに研究系のクラブは、元来が地味な性格の上に、好きな者同士が集まり、人に見せるということにそれ程熱心でないこともあって、生徒の入りが悪かった。もとより、このことは日常の活動が不充分なこともあるが、地味でまじめなことが流行らなくなった時代を反映していた。もっとも、この年の地学研究部が自作のプラネタリウムによって生徒の関心を集めたように、さまざまな努力が各文化部に望まれるところであった。執行部によるアンケート調査の結果では、文化部展示を見た生徒は60パーセントに過ぎず、また文化部自身の宣伝不足も指摘されている。そして文化部は部員不足に苦しんでいた。「芦笛」第39号によると、E・S・S部・生物部・コーラス部・邦楽

部・史学研究部・生物研究部・鉄道研究部が何らかの形で部員不足に苦しみ、すでに化学研究部・物理研究部・園芸飼育部は廃部同然であった。

11月1日に全学年ともクラス別の秋季遠足を実施した。12月2日に臨時生徒大会が開かれ、第38代自治会長が辞任した。「自分の力の限界を感じ、これ以上会長を続けていく自信を失くし、この状態のままでは大勢の人に迷惑をかけてしまうので、辞めたい」というのが辞任の理由であった。「芦高新聞」第225号は、「この辞任で、芦高の“自治”運営の難しさを一般生徒も認識し、生徒一人一人の参加できる範囲での、自治への参加を広げる努力が望まれる」と述べている。自治会は大きな危機に直面していた。会長辞任が承認された後、2学期中は副会長が会長代行を務め、3学期に会長選挙を行なうことが発表された。

自治会の機能低下が心配されたものの、期末考査後の12月17日からの校内球技大会は、無事に進行した。1986（昭和61）年1月5日に1年生のラグビー観戦が行なわれた。そして20日に自治会長選挙立会演説会、21日に投票が実施されて新自治会長が運動部長兼任で選出され、6月までの任期を務めることになった。25日に校内マラソン大会、25・26日に共通一次試験、28日から3日間の日程で3年生の卒業試験が行なわれた。



戸隠高原への2年生のスキー合宿

そして2月12日から16日まで、前年度とほぼ同じ日程で2年生のスキー旅行が実施された。ただ前年の7月26日に長野市で大規模な地すべりが発生し、従来のバードラインが通行止めとなつたため、その迂回路としてアップルラインを通ることとなり、多

少時間が余分にかかることになった。

2月25日に、芦高第38回卒業証書授与式が行なわれ、第41期生男子252名、女子220名、計472名が卒業した。なお、この時の卒業式で式場に「日の丸」が掲載された。浅場校長は2月5日の職員会議で、「世間一般が掲揚するから行なうのではなく、国際化の時代を迎えて国旗が必要とされているという現状を認識すべきであり、もう掲揚すべき時期だと判断している」との立場から、「日の丸」掲揚の意志を表明していた。これに対して、職員の中からは反対の声が起るとともに、意外の念と不安の思いをもつ職員が多かった。また職員会議議長団は、「職員の意志を尊重し、民主的かつ信頼ある職場を維持していただきたい」との要望を明らかにした。「日の丸」問題は、本校にとって、校長と職員の意見とが対立するというあまり例のない事態であった。しかし、「職員会議規程問題」や4年間の校長在任中に生まれたある種の信頼関係を背景に、職員の多くは「校長の立場」に対して一定の理解を示し、決定的事態は避けられた。

前年度から論議が続いていた理数コース設置問題は、この年も設置の是非をめぐって論議が重ねられた。そして、理数コースの設置については中高連絡会でも芦屋地区への設置が要望され、さらに芦屋市教育長からもコース設置の要請があった。しかし、コースを設置しなくとも現行のカリキュラムで十分対応できる、理数コースから普通科に変わることが困難だ、低学年からの進路の固定化は望ましくない、芦屋学区のように狭い学区ではコース設置のメリットが期待できない、生徒指導上のマイナスが予想されるなどの意見が多く出された。結局、芦高としては理数コースを設置しないということになった。そして1986（昭和61）年度から、県下の各高校に理数コースおよび英語コースが設置され、本校では再びコース設置の議論がなされたが、やはり否定的な意見が多かった。そこで1987（昭和62）年度に、芦屋地区では芦屋南高校に理数コースが設置されることになった。

また高校入学者選抜について、7月20日に出された文部省初等中等教育局長通知「公立高等学校の入

学者選抜について」にのっとり、10月11日に兵庫県教育委員会は「昭和61年度兵庫県立高等学校入学者選抜要綱」を発表していた。その中で「調査書の特別活動、部活動等の記録において顕著な内容がある場合には、その内容を各高等学校の特色に応じて評価して特別に取り扱ってよいこととする」とあり、その場合は「当該高等学校の合否判定の境界線に当たる点数からこの点数の10%に当たる点数を減じた点数を合格の下限として、特別に合否の判定を行なう」とされた。また「学力検査の成績と調査書の成績評定との比重が同等となるようにする」とあった。そして学力検査は、「国語」「社会」「数学」「理科」「英語（聞き取りテストを含む）」の5教科で実施するとされた。高校入学者の選抜方法は、1977（昭和52）年度以来、「原則として調査書を主資料とする」とした上で、理解力、応用力、考え方など基礎的な学力、思考力の検査が行なわれてきたが、1984（昭和59）年度からは実技系を除き、教材独立の検査となっていた。こうして1986（昭和61）年度の高校入試から、学力検査の比重が一段と重視されるようになり、5教科各50分の検査が実施されることになった。なお特別活動および部活動等による「特別取り扱い」については、本校はこの年は見送り、次年度から実施することにした。

3月15日に入学者選抜学力検査が行なわれ、20日に合格者470名が発表された。そして3月31日に浅場七郎校長が願いにより校長を免ぜられた。

1986（昭和61）年4月1日に、兵庫県立神戸聾学校長櫻井豊氏が本校第13代校長に補せられ、また中島寛教頭が同時に着任した。校長・教頭が同時に交代したのは、1956（昭和31）年および1962（昭和37）年について3度目であった。4月8日に始業式ならびに入学式が行なわれ、12日は創立記念日で休業日であった。この年は、本校が県立芦屋中学校として、1940（昭和15）年に創立されてから46周年目にあたり、創立50周年をまもなく迎えようとしていた。そこでこの4月から職員7名からなる「五十周年記念特別委員会」が発足し、記念行事・記念誌発行などの計画をすすめることになった。

4月25日の午後に、自治会主催の講演会が体育館

で開かれ、本校第23期生のタイガー大越（大越徹）氏が「青春への挑戦」と題する講演を行なった。氏はボストンのバークリー音楽院卒業後、同校講師を務めるとともにジャズトランペッターとして活躍中である。講演後に吹奏楽部に対して合奏指導が行なわれ、澄んだトランペットの音色が、改築を間近にひかえた体育館に響きわたった。なお当日は、NHKが本校でタイガー大越氏の取材を行なった。

4月28日に春季遠足が行なわれ、例年通りに1年生はゴロゴロ岳、2年生は修法ヶ原、3年生は甲山森林公園に出かけた。5月12日には第27回定期戦が実施され、9-8で辛くも芦高が勝ってはじめての5連勝を達成した。6月5日に自治会役員選挙立会演説会、6日に投票が行なわれて第39代執行委員会が成立した。

そして6月7～9日には第30回県高校総合体育大会が開催され、サッカー部が3位、弓道部女子も団体3位の成績をおさめ、サッカー部は6月の近畿大会にも出場し、2名が県優秀選手として表彰された。またバスケットボール部女子が4月の近畿大会に出場した。さらに陸上競技部の男子1名、水泳部の男子1名、女子1名が近畿大会の出場権を得た（水泳の男子は1年生野活のため出場辞退）。ラグビー部は年が明けた2月の県の新人選で優勝し、3月の近畿大会に出場した。一方、文化部ではアマチュア無線研究部がオール兵庫コンテスト社団局の部で2位となり、写真部が全日本学生写真コンテストに入選者を出した。邦楽部は11月の近畿高校総合文化祭および県高校総合文化祭に出場し、年が明けた1月の県のコンクールで金賞を獲得した。

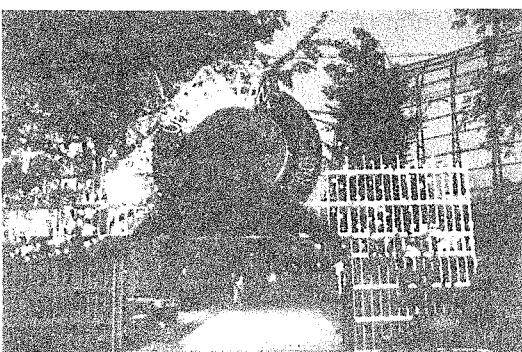
1年生の大山における野外活動は、これまでの8月上旬実施からやや時期が早まり、この年は夏休みに入って早々の7月23～25日に実施された。鏡ヶ成国民休暇村に到着した時は、まだ前日の雨が残り、あたり一面霧が立ちこめていた。同行した櫻井校長は次のように述べている。

「二日目は、野活最大の行事、大山登山とキャンプファイヤーである。登山は、体調の悪い数名を残しほとんど全員で取り組んだのであるが、落後者もなく皆頂上を踏むことができた。前日の雨ではこり

も立たず歩き易い登山道であったこと、眺望こそ悪かったが、ガスのため直射日光にさらされなかつたことなどの好条件はあったが、励まし合いながら助け合いながらの登山であった。山麓から中腹にかけてのブナの原生林、頂上付近のダイセンキャラボクの群落、また、頂上付近に乱舞するトンボの大群、いずれも大山ならではの珍しい風物であった」（野活文集「Let's Try Daisen」）

グランド北側の木造平家建の運動部部室は、1948（昭和23）年10月に体育器具庫兼更衣室として建てられたもので、広さは85.95平方メートルであった。運動部部室は、すでに建築後40年近くが経過して相当に老朽化しており、水はけが悪くて地面がでこぼこの状態で、内部は窓がないため通気性が悪く、相当劣悪な状態であった。そしてグランドが芦屋市の公園課に属しているため、建てかえの計画は容易にすすまなかった。ようやくこの年に建てかえが認められ、5月15日に着工して9月22日に完成した。この新しい運動部部室は、コンクリートブロック2階建で、建築面積88.50平方メートル、建築延面積は177.00平方メートル、北中組の施工により、工費は付帯工事費を含めて1827万5000円であった。なお部室数は13で、硬庭・軟庭・弓道・陸上・サッカー・ラグビー・野球・マネージャー・体操の部室および本校体育倉庫・武庫高校倉庫にあてられた。

執行部は「自治会員皆で創ろう記念祭」を基本方針に、「地球の中の人間、又、その中の芦高、そして、地球そのものの問題点を考えていこう」との趣旨で、第38回記念祭のテーマを“THE EARTH”とした。



第38回記念祭

また教師側は、第38代自治会長の中途での辞任の反

省に立ち、記念祭を計画的・組織的に運営するよう生徒を指導した。

こうして10月1日に開幕式および体育祭が行なわれた。当日は雨であったが、天気予報では曇り時々雨で、翌日はもっと悪くなるということであった。また体育館建築をひかえていることもあり、日程の上で余裕がなかったため、雨の中を体育祭は強行された。結局、体育祭は途中で中止となつた。2日はこの年がはじめての企画となる“Culture Festival in A.U.S.S.”が行なわれた。内容はクラス合唱、バンド演奏、弁論大会などで、弁論大会は久しぶりの復活であった。取り壊される体育館を惜しんでの行事であったCulture Festivalは、内容がさまざまに変化しながら、その後、改築された体育館における行事として今日に続いている。3日はルナホールにおいて文化部公演および本校大教室における映画鑑賞会が行なわれ、映画は「THE DAY AFTER」であった。そして4・5日は自治会展示（クラス展示）および文化部展示が行なわれた。この数年、自治会展示のあり方がさまざまな論議を呼んでいたが、この年は前年と同じく、1・2年生はテーマにそった「空」「海」「人間」「大地」「地球儀作り」の5つの内容で展示を行なつた。また4日には体育館で記念講演会が開かれ、京都市立伏見工業高校教諭で同校ラグビー部監督の山口良治氏が、「未知なる自己の発見」と題する講演を行なつた。5日には図書館において、“Free Talk A.U.S.S.”が、「地球は滅びるか」のテーマで開かれた。なお献血の呼びかけも前年に続いて行なわれた。

体育館改築工事は9月26日に着工され、記念祭終了後の10月8日より本格化した。この工事は、体育館とプールの位置を入れ替え、北側に体育館、南側にプールを、さらにプールの東側に運動部部室を建築しようとするもので、翌年11月の完成予定であった。11月28日には旧体育館の取り壊し工事が完了し、芦高生が24年間にわたって慣れ親しんできた体育館は姿を消した。なお、工事のために水泳部が芦屋南高校などのプールを借用したのをはじめ、卓球・体操・バレーボール・バスケットボール部は、本校の教室やグランド・剣道場などはもとより、芦

屋市青少年センター・芦屋市体育館や他校に練習場を求めるにあればならなかった。また硬式・軟式庭球部も、工事によって練習に大きな制約を受けた。

11月1日にクラス別の秋季遠足、19・20日には3年生の県下一斉模擬試験が実施された。そして1987(昭和62)年1月5日に1年生男子のラグビー見学24・25日には共通一次試験が行なわれた。本校からこの年は139名が受験した。

1979(昭和54)年1月にはじまった共通一次試験は、1987(昭和62)年度入試から大幅な変更が行なわれた。これまでの5教科7科目にかわって5教科5科目以下とする「共通一次の科目削減」と、「受験機会の複数化」としてA・Bグループ分け入試である。さらに二次出願の時期も共通一次後から前に操り上がった。その結果、年々減少していた現役志願率が増加し、志願者総数も過去最高の39万4134人に達した。しかし、「足切り」の対象者の増加や、大量の入学辞退者など思わぬ問題が続出した。そして複雑な入試制度のため、全国的に情報を受験産業に依存せざるをえない情勢が強まった。また以前から私立大学・短大を中心に行なわれてきた推薦入試が、国公立大学でもかなりの広がりを見せてきた。

1月31日に校内マラソン大会が開かれた。この年からマラソンコースは、芦屋中央公園をスタートおよびゴールとし、芦屋浜海岸道路を周回するコースに改められた。これまで芦屋警察署の協力で、芦屋川左岸から芦屋浜海岸道路を往復するコースが、本校のマラソンコースとなっていた。しかし、近年の交通量の増加にともない、とくに松浜公園付近での走行に多大の支障が生じ、また芦屋川河川敷の改修工事が重なってこの年からの変更となった。距離は男子8000m、女子5000mであった。

そして2月11日に2年生が野外活動に出発した。スキーコースは、前年度までの長野県戸隠村にかわり、この年から岐阜県高鷲村の鷲ヶ岳スキー場に変更になっていた。1985(昭和60)年1月の夜行バスの事故によって、多数の日本福祉大学生が死亡したことを見きっかけに、県教委から夜行バスの利用についての指導があったこと、および長野市で大規模な地すべりが発生し、従来のバードラインが通れなくなり、

迂回のために相当の時間を要するようになったことが、行先変更の理由であった。ところがこの年は暖冬のため積雪が少なく、鷲ヶ岳スキー場のいたところで黒い地肌が露出していた。おまけにスキー訓練第1日目の14日は雨で、午前中は室内での講習となり、午後から宿舎下手のゴルフ場でようやく訓練がはじまった。13日もゴルフ場、14日にはようやくゲレンデでの訓練となった。そして14日の午後4時に、生徒たちは鷲ヶ岳スキー場に別れを告げ、岐阜市の長良川河畔の宿舎に向かった。野活最終日の15日には明治村見学が行なわれ、夕刻に芦高へ到着して野活は終了した。

2月25日に芦高第39回卒業証書授与式が行なわれ、第42期生男子245名、女子222名、計467名が卒業した。体育館が改築中のため、式は西宮市民会館で行なわれた。この年の卒業式も「日の丸」が掲揚された。1月21日の職員会議で、卒業式における「日の丸」掲揚が協議事項となり、僅少差で掲揚は否決された。しかし、櫻井校長は「昨年掲げて今年掲げないのはつらい。対外的に大きな行事の際には掲揚したい」との立場から掲揚の態度を表明した。これに対して、職員会議議長団は「職員の意志を充分に尊重して頂きたい、そして今後も、民主的かつ信頼ある職場を維持して頂きたい」と抗議した。校長は心情の吐露が不十分であったことについては、遺憾の意を明らかにした。結局、校長の意向通りに「日の丸」は掲揚されたが、この問題は職員間に微妙なしこりを残したと思われる。

3月2日から6日まで学年末考査が実施され、7日から校内球技大会が行なわれた。そして、16日に高校入学者選抜学力検査が行なわれ、20日に合格者470名が発表された。なお1982(昭和57)年4月1日から施行された「地域改善特別措置法」は3月31日に期限切れとなり、4月1日から「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置法に関する法律(地対財特法)」が新たに施行された。これは1969(昭和44)年の「同和対策事業特別措置法」以来、18年間にわたる法律のもとでの事業の見直しを行なったもので、今後、事業はできるだけ一般対策として行なうこと、真に必要な事業に限って特別対

策を行なうことを内容とする、5年間の限時法であった。

1987（昭和62）年4月8日に第1学期始業式および入学式が行なわれ、この年は12日の創立記念日が日曜日と重なった。16日に生徒大会が開かれてこの年の自治会予算が成立し、28日には春季遠足が実施され、1年生はゴロゴロ岳、2年生は修法ヶ原、3年生は甲山に出かけた。そして5月7日には第28回対県西定期戦が行なわれ、この年も10-7で芦高が勝利をおさめた。なおこの年からヨット同好会が発足した。ヨット競技は指導者や安全性、費用など高校のクラブとしてはいくつかの問題点があった。しかし、1988（昭和63）年度全国高等学校総合体育大会が兵庫県で開催予定のため、県はヨット競技育成のために芦高に対する協力を約束していた。そして同好会発足は部昇格を前提とするものであった。また県からの委託料が減額されたため、クラブの遠征や合宿に支障が出ることが予想された。そこで育友会および同窓会による部活動後援会が、この年から発足して部活動を援助することになった。

5月19日の職員会議で、櫻井校長は「自治・自由・創造」を本校の教育綱領とすることを提案して了承された。ところで本校の教育方針は、あまり明確ではないが、芦屋中学校発足当時においては「質素と剛健」であったと思われる。またこのころから自由の気風が重んぜられもした。そして、戦後まもない1946（昭和21）年5月24日制定の「校友会歌（現自治会歌）」では、「自治と自由と創造」の言葉が見られる。また「校友会規約」では「学園の自由を守る」とある。新制高校発足のころは、教育方針の「理想的学園像」として「われらは、文化的、民主的で、平和を愛好する社会形成者となることを目標とする。そのためにまず、心身ともに健康で研学に励むとともに、趣味を養い、奉仕を喜び、責任感の裏付けある、自主的な生徒となることに努める。かくてわれらのえがく理想的学園像は、知性豊かに、気品のかおり高い、若き生命が躍動する、清新はつらつたる学園でありたい」ということがうたわれた。のちに「学園」は「自由の学園」あるいは「自主の学園」へと変化した。また指導上の努力点として、「自

由とこれに伴う責任とを重んじ自主的に行動する明朗快活な態度の養成に努力する」ということもうたわれた。そして1958（昭和33）年9月制定の「第十回記念祭賛歌」の歌詞の一節には「自由創造純潔のみどりになびく旗の風」とある。

1959（昭和34）年度「学校要覧」における教育方針の中の生徒指導の重点では、「時勢に左右されることなく、新教育発足以来、生々発展の一路をたどっているのは、本校自治活動の特色であるが、更にその自由を、自律的に高め全般に着実的なものとなさしめるよう努力する」とあり、「自律」の言葉が見られる。そして1965（昭和40）年度「学校要覧」の生徒指導の重点では、「本校独自の自由・自治・自律の気風を尊重するとともに、規律・きびしさ・ねばりの気風を織込ことに努力する」とある。そして1966（昭和41）年度「学校要覧」から、本校の教育綱領として「自律・自治・自由」が掲げられるにいたった。

本校が生徒の自治活動を重んじたこと、しばしば自由な校風ということが言われたことからして、「自治」と「自由」が本校の校訓として定着していたことは間違いかなかった。しかし、「創造」あるいは「自律」については異論が多かった。生徒の間では、「自由・自治・創造」の言葉が新制高校発足当初より語り継がれてきた。一方、1966（昭和41）年度の「学校要覧」以来、「自由・自治・自律」ということも言われるようになっていた。なお1982（昭和57）年春に卒業した第37期生は、「自治・自由・創造」の碑文を残した。そして櫻井校長は、「自治・自由」の次に来る言葉として、「創造」がよりふさわしいと考えたのである。こうして1987（昭和62）年度「学校要覧」から、「自治・自由・創造」が本校の教育綱領として掲げられることになった。

5月28日に自治会役員選挙立会演説会が開かれた。自治会の「選挙規定」によると、選挙管理委員会は10名によって構成されるべきであったが、この年は人が集まらず5名で発足していた。そして30日に投票が行なわれ、第40代執行委員会が選出された。そして6月6～8日に第31回県高校総合体育大会が開かれた。残念ながら県高校総体では、体育馆

改築中という悪条件があったとはいえ、本校運動部の目立った活躍は見られなかった。ただラグビー部は、9月の国体近畿予選に3年生2名が県選抜チームのメンバーとして選ばれ、県チームは準決勝に進出した。そしてラグビー部は、11月の全国大会県予選で3位の成績をおさめ、4名が優秀選手として表彰された。またヨット同好会の女子3名が、9月の沖縄国体のヨット競技に出場した。一方、文化部の活躍は目覚ましかった。とくに演劇部は、11月の県高校演劇コンクールおよび近畿高校演劇コンクールで、「わっと・あ・わんだふる・わーるど！？」を上演して最優秀賞を受け、翌年の全国高校演劇コンクールへの出場が決まった。また将棋部も県秋季高校将棋選手権大会で優勝した。さらに吹奏楽部は県吹奏楽コンクールで銅賞、アマチュア無線研究部はオール兵庫コンテスト県内社団局の部で3位となった。そして邦楽部は前年度の県のコンクールで金賞を獲得したことにより、11月の近畿大会に出場した。そして年が明けた1月の県のコンクールでは銀賞に選ばれた。

1年生の大山における野外活動は、この年も夏休み中に実施された。8月3日の朝8時に芦高を出発した1年生は、テントと宿舎に分かれて交互に宿泊し、4日に落後者を出すことなく大山に登頂した。あいにく山頂は霧のためまったく視界がきかず、真夏だというのに、一同は予想外の寒さに見舞われた。最終日の5日は朝から雨となったが、生徒たちは閉村式を終え、鳥取砂丘を見学した後に帰路につき、楽しい思い出とともに芦高に帰ってきた。



第39回記念祭

第39回記念祭のテーマは“OUR DREAMS”であっ

た。このテーマについて、執行部は記念祭のパンフレットで「今年のテーマは、やや抽象的な感も見受けられましたが、創造的な場としての記念祭に、ふさわしいものではないでしょうか」と述べている。9月22日に開幕式ついで体育祭が行なわれ、23日は展示の準備日にあてられた。24日は西宮市民会館で記念講演会および映画鑑賞会が開かれた。記念講演会では、本校第9期生でNHK大阪放送局視聴者広報センター副部長の土居原作郎氏が「ドラマ創りに夢をかけて」と題する講演を行ない、「表現力豊かな人間であれ」と生徒たちに語りかけた。その後、「砂の器」が上映された。25日はルナホールで文化部公演、そして26・27日は自治会展示および文化部展示が行なわれた。自治会展示では、1・2年生はテーマにそった展示、3年生は自由展示であった。また27日には執行部主催の“Free Talk A.U.S.S.”も図書館で開かれ、「夢のある世界・現実の世界」と「私達の夢」の2部に分かれて討論を繰り広げた。そして3時25分から閉幕祭が行なわれた。なおこの年は閉幕祭から、フォークダンスが全員参加となつた。

11月2日に秋季遠足が実施され、19・20日には3年生の県下一斎模擬試験が行なわれた。そして11月30日に体育馆・プール・プール附属棟兼部室の工事が完成した。主施行業者は本館改築工事と同じ林建設工業株式会社で、付帯工事を含めて総工費は4億8228万8000円を要した。新体育馆は鉄筋2階建で建築面積が1342.60平方メートル、延面積が2818.05平方メートルで、1階が柔道場・剣道場・生徒集会室・トレーニング室、2階が体育室であった。プールは鋼板製で、6コース、25m×13mの325平方メートルの広さであった。またプール附属棟兼部室は鉄筋コンクリート3階建で、建築面積が102.32平方メートル、延面積が231.32平方メートル、1階に更衣室、2・3階に水泳・剣道・バレー・柔道・卓球・バスケット・体操・卓球部の部室として、12室が用意された。なお部室は後に多少の異動があった。そして12月17日に体育馆竣工記念式典が挙行され、記念行事として、第5期生で野球評論家の有本義明氏による「野球と私」の講演も行なわれた。なお体

育館改築工事中に、グランドおよびバレーコートの照明設備の改良工事および囲壁改築工事も実施された。

1988（昭和63）年1月5日に1年生のラグビー観戦、11日に1・2年生の県下一斉実力考查、23・24日に共通一次試験が行なわれた。そして1月31日に校内マラソン大会、2月13～17日に2年生の野外活動が実施された。前年度は雪不足に泣かされたが、この年は十分な積雪と好天に恵まれ、スキー実習は順調にすすんだ。なお前年に行なわれた明治村見学は、日程があわただしくなることもあって、この年は実施されなかった。

2月25日に芦高第40回卒業証書授与式が行なわれ、第43期生男子216名、女子202名、計418名が卒業した。そして3月16日に高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に470名の合格者が発表された。23日の終業式の後、教職員の異動の内示があった。この異動の内容をめぐり、強制配転として職員が学校長に抗議し、年度末まで粉糾が続いた。

### 3 創立五十周年を迎えて（1988～90年）

本館および体育館の改築によって、本校の施設・設備は一新され、かつての芦高が置かれていた劣悪な教育環境はかなり改善された。しかし、狭い校地や騒音問題は依然として解決されなかつた。冷房が入る直前の初夏のころには、北側の窓はもちろん南側の窓も開けざるをえず、騒音によって教師の声はかき消されがちで、授業は多大の支障をこうむっている。そして外観が整ったものの、芦高は新たな問題に直面するようになっていた。その一つは進路指導、とくに進学に関する問題であった。このところ、本校の進学成績の不振が各方面から指摘されていた。「学校経営の重点」には、進路指導や教科指導の徹底が以前から取り上げられてきたが、とくに1988（昭和63）年度からは、その第一に「進路指導の充実」が掲げられ、本校は進路指導に相当力を入れることにした。また芦高生も大きく変わってきた。社会的問題ともなっているいわゆる「登校拒否」生徒の増加は、本校でも例外ではなく、毎年若干の

生徒が出席日数の不足から原級留置となつたり、退学したりするようになった。教師たちは、これらの生徒に対する指導に多大の努力を傾けてはいるが、有効な解決策はなかなか見出しえていない。

日本が国際社会の一員として大きな位置を占め、それ相当の役割を果たすことが求められている現在にあって、教育もまた大きく変わりつつある。兵庫県は語学教育の充実を目的に、1977（昭和52）年度から米国人英語指導主事助手招致事業を開始し、1979（昭和54）年度からは英国人英語指導教員助手招致事業をはじめた。さらに1982（昭和57）年度改訂の「高等学校学習指導要領」で、実用的な外国語教育が重視されるようになったことを受け、英語コースや中国語・ハングル講座が設置されるようになった。指導助手制度は、1987（昭和62）年度から外国人英語指導助手招致事業へと発展した。本校では1979（昭和54）年9月から指導助手が訪れるようになったが、そのころは必ずしも毎週定期的にというわけではなかった。そして1986（昭和61）年9月からは、訪問指導校として継続的に指導助手が本校を訪れるようになった。

また「学制」公布によって近代学校制度の導入をはかった明治の「第1の教育改革」、「六三制」導入などの戦後の「第2の教育改革」について、現代の教育の荒廃を是正し、21世紀に向けた教育のあり方を示そうとする「第3の教育改革」が現在すすめられつつある。

中曾根内閣は1984（昭和59）年8月21日に、「教育改革に対する国民的要請にこたえ、長期的展望に立ち、政府全体の責任で教育改革に取り組む」ことを目的に、これまでの文相の諮問機関である中央教育審議会にかわり、首相直属の諮問機関として臨時教育審議会（臨教審）を発足させた。臨教審は設置期間が3カ年とされ、1985（昭和60）年6月26日に「教育改革に関する第1次答申」を政府に提出した。この中で「教育基本法」の精神にのっとった上で、「個性の重視」を教育改革の基本精神とすることが提唱された。そして学歴社会の弊害是正や共通一次試験にかわる「新テスト」の創設、高等専修学校卒業者への大学入学資格付与、6年制中等学校の新設、